

知的障害のある成人における施設外支援に対する学生ジョブコーチ支援

- セルフ・マネージメント行動の形成・維持に向けた支援内容の検討 -

Work Support for Individuals with Disabilities through Student Job Coaching

○山口真理子*・中鹿直樹**・望月昭**

(京都府立南山城養護学校*) (立命館大学応用人間科学研究科**)

YAMAGUCHI, Mariko NAKASHIKA, Naoki MOCHIZUKI, Akira

(Minamiyamashiro Special Education School) (Graduate School of Science for Human Services Ritsumeikan University)

keywords: Job coach, Outside support facilities, Self-management

問題・目的

本実践は、筆者が学生ジョブコーチ(以下、「学生JC」として、就労継続支援B型を利用する知的障害のある成人を対象に、京宿家の清掃業務についての就労支援(施設外支援)したものである。支援実践および研究の主な目的は3点であった。1つは、委託された業務を遂行、成立させるために、従来型のジョブコーチ作業と同様に、対象者における作業遂行自立率を上げることであった。2つめは、知的障害のある個人の「キャリアアップ」のための支援を行うことであった。具体的には、個々人のセルフ・マネージメント行動の形成と維持に向けた支援を行うとともに、支援内容を検討することであった。3つめは、産・学・福祉の連携としての「施設外支援」において、企業(京宿家)とNPO(共同作業所)と協働しながら、当事者のキャリアアップを前提として継続的就労のために、第三のセクターとして大学(学生JC)がどのように機能していけるかという、連携そのものの可能性を検討することであった。

方法

対象者 共同作業所(就労継続支援B型)を利用する、知的障害のある成人4名(Aさん、Bさん、Cさん、Dさん)であった。(Dさんは本実践中は研修期間であったため、作業遂行自立率を算出していない。)

作業場所・内容 京宿家(町家を改造した宿泊施設)1棟分の清掃及び、リネン交換、ベッドメイキング、アメニティの補充・セッティング等を行った。

作業日時 週3回、隔日でおこなった。1日あたり対象者2~3名で作業を行い、平均で約2時間半かかった。

支援者 学生JCが全作業遂行場面における直接支援を行うとともに、間接支援として、清掃前後に話し合いや振り返りを行う機会を設けた。これは対象者と支援者が作業に関する具体的な話し合いをするために行った。

標的行動 京宿家マネージャーに求められている作業完成度に達するよう作業を遂行できることであり、具体的には作業遂行自立率を高めることであった。また、学生JCがフェイディングしても、最終的に対象者だけで作業を遂行できるようにすることであった。

独立変数 作業の内容を具体的に振り返ることを目的として、振り返りシートを用いた「振り返りの機会」を設定したことであった。

従属変数 作業遂行自立率の上昇であった。また、作業を遂行する中で要領よく作業を進めるための工夫点や改善点の生起の有無であった。

デザイン ABデザインを用いた。

BL期 対象者が行った課題分析をもとに作成した「作業工程表」を用いて作業を遂行した。

介入 BL期で用いた作業工程表を引き続き使用して作業を行うとともに、「振り返りシート」を導入し、作業の内容を具体的に振り返る機会を設けた。振り返りシートには各清掃箇所につき「今日頑張りたいこと」「本日の自己評価(◎○△×)」「今日できたこと・頑張ったこと・工夫点」「次回頑張りたいこと」を挙げる欄を設けた。

結果・考察

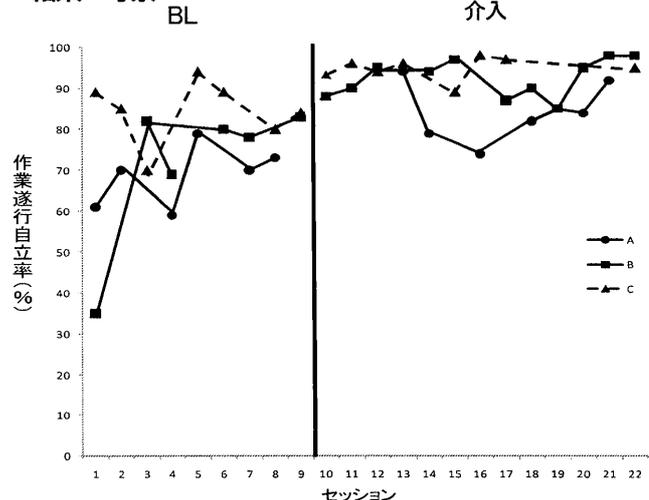


Fig1. 各対象者における作業遂行自立率の推移

結果をFig1に示した。支援の結果、各対象者において作業自立遂行率が上昇した(各フェーズの平均作業自立遂行率は、Aさん:BL期68.7%, 介入期84.3%, Bさん:BL期71.2%, 介入期92.5%, Cさん:BL期84.4%, 介入期94.8%)。その他にも、作業の中で仕事をしやすくする工夫や効率よく作業を遂行するための工夫を対象者自らが提案し、それを実行するといった様々なセルフ・マネージメントを通じたキャリアアップがみられた。例えば、「振り返りシート」を活用し、記載事項を次回の清掃作業前に確認し、その日の「今日頑張りたいこと」を決め、作業工程表の該当箇所にマーカーを引く対象者もいた。

今後の課題としては、各対象者において本実践で形成されたセルフ・マネージメント行動を般化させ、作業者同士で安定した作業遂行と完成度を維持することが可能となる環境の設定及び手続きの検討が挙げられた。

謝辞

本実践研究は、NPO法人swingの木ノ戸施設長をはじめ、職員、利用者みなさん、京宿家マネージャー田谷さんとのコラボレーションにより実現しました。感謝しております。ありがとうございました。